

2014 年度「学習状況に関する調査」集計結果について

文責：教務部長 名畑嘉則

本報告書は、教務部が 2014 年 12 月に本学全学生を対象にアンケート形式により実施した学習状況調査に関して、集計結果を基に若干の考察を加えるものである。

本調査の目的は、学生の学習時間を含めた学生生活の実態を把握することを主とする。ただし、調査に用いたアンケートは、2013 年度に文部科学省国立教育政策研究所が実施した「大学生の学習状況に関する調査」で用いられたものを基礎としたものであり、学習時間・生活時間に関する設問以外にも学習経験に関する設問など様々な項目が含まれている。

本調査においては、一部の設問を本学の実態に合わせて変更したり、本学独自の項目を幾つか加えたりした以外は、概ね国立教育政策研究所による調査の設問項目をそのまま利用した。その理由は、各項目において国立教育政策研究所が公表している全国平均と本学の調査結果を比較することができるようにするためであった。この比較を通じて、本学のカリキュラムや教育環境において全国の大学の平均的水準との間で差のある部分が把握できるのではないかと期待されるからである。

以下、項目ごとに結果を踏まえ、全国平均と比較しながら記述してゆく。

「ふだんの生活について」

問 1 「1 週間あたりの生活時間」

本設問は、学生が学期中の典型的な 1 週間内において、各項目にどれだけの時間を使ったかを、「0 時間」「1-5 時間」「6-10 時間」「11-15 時間」「16-20 時間」「21-25 時間」「26-30 時間」「31 時間以上」の 8 段階で回答する形式のものである。

「授業への出席時間」については、全国平均では「16-20 時間」の回答が 19.6%で最多であるのに対し、本学では「21-25 時間」が 26.3%で最多である。

また、「授業の予習・復習等の時間」では、全国平均では「1-5 時間」が 55.2%で最多であるが、本学でも「1-5 時間」が 64.4%で最多である。また、「0 時間」という回答は全国では 15.8%であるが、本学では 10.6%である。「0 時間」という回答自体は少ないが、「0-5 時間」という枠で考えれば全国が 71.0%であるのに対し、本学は 75.0%と上回ることとなる。

「大学の授業とは関係ない自主的な学習」では、全国では「1-5 時間」が 45.2%で最多であるのに対し、本学では「0 時間」が 42.4%で、「1-5 時間」の 41.9%を上回る。

以上の学習に関する時間の使い方を見ると、本学の学生は全国平均よりも授業は多めに履修しているが、授業外の学修時間はむしろ少なく、大学の授業と関係のない学習にかかる時間も少なめであるという傾向が見られる。

「サークル・部活動」では、全国・本学ともに「0 時間」が最多の回答であるが、これを

除けば、全国では「1-5時間」が27.1%であるのに対し、本学では31.4%、「6-10時間」が全国では10.0%であるのに対し本学では13.7%である。サークル活動への取り組みは全国平均よりも幾分比重が高いという結果となっている。

「アルバイト」については、全国平均と似たような傾向を示しているが、「0-10時間」という枠で考えると、全国では53.6%であるのに対し、本学では50.6%であり、本学学生の方がアルバイトに時間をかける（11時間以上）比率が若干高めである。

問2「大学内の施設で過ごす時間」

本設問は大学内の施設で過ごす時間について回答させるものである。施設に関しては、本学は全国調査の項目に挙げられるものと違いがあるため、項目の設定自体をやや異にしている。全国では「図書館・ラーニングコモンズ・自習室」という項目を設けているが、本学においては2014年度時点ではラーニングコモンズは未設置であったため、「図書館」と「PC教室・PC自習室・空き教室」という項目に分けて立てた。全国では「図書館・ラーニングコモンズ・自習室」の「1-5時間」利用が最多で47.8%であるのに対し、本学では「図書館」の「1-5時間」利用が58.3%、「PC室」が56.5%と非常に多くなっている。

「大学での授業について」

問5「授業とあなたの関係」

本設問は全国調査においては問4に該当する。大学の授業と学生自身の人生もしくは「やりたいこと」との関連性について問うものである。内訳の項目は全国調査と重なっているが、本学では項目を一つ増やしている。

「卒業後にやりたいことは決まっている」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が72.9%であるのに対し、本学では62.1%とやや低い。この回答は学部学科によって差が顕著であり、特に資格系でない文学部各学科では低くなる傾向がある。

「大学での授業はやりたいことと密接に関わっている」についても同様に、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が65.4%であるのに対し、本学では57.6%と低い。この項目についても学科間で大きな差があり、例えば最も高い保育学科では86.3%であるのに対し、最も低い英語文化学科では40.5%である。

「授業をつうじてやりたいことを見つけたい」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が67.9%であるのに対し、本学では69.2%であり、授業に対する期待度という点では大きなものがあることを示す。

「自分の人生を豊かにすることに関わっている」は本学独自の項目であるが、「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が80.2%であり、本学の授業が、職業等に直接結び付く形ではなくとも、何らかの形で各学生の人生に大きく寄与していることを示している。

問6「授業への取り組み」

本設問は全国調査においては問5に該当する。授業への取り組みの態度に関して問うもので、内訳の項目は全国調査と重なっているが、本学では項目を一つ増やしている。

「興味がわからない授業でもきちんと出席する」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が85%であるのに対し、本学では87.7%である。

「なるべく良い成績をとるようにしている」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が81%であるのに対し、本学では83.4%である。

「グループワークやディスカッションに積極的に参加している」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が62.4%であるのに対し、本学では64.7%である。

「必要な予習や復習をしたうえで授業にのぞんでいる」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が38.5%であるのに対し、本学では43.2%である。

「大学の友人どうしで授業の予復習やわからないところの勉強をする」については、全国では「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計が58.2%であるのに対し、本学では47.1%である。

以上の授業への取り組み態度について見ると、出席、成績向上への意欲、授業への積極的参加、予習・復習という点ではいずれも本学の平均が全国を上回っており、本学学生の「真面目さ」を示している。ただし「友人どうしでの勉強」については全国平均を大きく下回っており、本学学生が個人が孤立した状況で学習していること、もしくは個人での学習を好む傾向があることを示す結果となった。

「わからないところがあれば、教員に積極的に質問をする」は本学が独自に設けた項目であるが、「ある程度あてはまる」と「よくあてはまる」の回答の合計は30.5%である。全国調査にはない項目なので比較ができないが、決して高い数値とは言えないだろう。これも本学学生の「真面目だが内気」という傾向を示す指標と見られるかもしれない。

問7「授業での経験」

本設問は全国調査においては問6に該当する。授業で経験した（実施された）事柄についての頻度、おおよその度数が不足か過剰かを問うもので、内訳の項目は全て全国調査と同じである。

「授業内容に興味をわくように工夫されている」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が67.4%であるのに対し、本学では68.1%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国57.8%に対して本学54.9%である。

「理解しやすいように教え方が工夫されている」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が69.4%であるのに対し、本学では73%である。また、

同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 57.6%に対して本学 54.1%である。

「TA などによる補助的な指導がある」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 36.2%であるのに対し、本学では 28.1%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 27.2%に対して本学 20.6%である。

「出席が重視される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 80%であるのに対し、本学では 87.4%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 18.0%に対して本学 16.0%である。

「少人数、ゼミ形式の授業」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 50.2%であるのに対し、本学では 52.8%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 28.6%に対して本学 16.8%である。

「期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 90.7%であるのに対し、本学では 89.2%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 6.5%に対して本学 3.3%である。

「適切なコメントが付されて課題などの提出物が返却される」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 28.7%であるのに対し、本学では 46.3%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 55.4%に対して本学 40.2%である。

「授業中に自分の意見や考えを述べる」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 36.4%であるのに対し、本学では 45.6%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 23.0%に対して本学 10.7%である。

「グループワークなど、学生が参加する機会がある」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 48.4%であるのに対し、本学では 63.3%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 27.4%に対して本学 12.9%である。

「主に英語でおこなわれる授業」については、全国では「ある程度あった」と「よくあった」の回答の合計が 25.6%であるのに対し、本学では 37.2%である。また、同項目に対する「増やしてほしい」の回答は、全国 29.1%に対して本学 14.6%である。

上記のとおり、「TA の補助」以外のすべての項目において、本学における実施度の数値が全国平均を上回り、不足を訴える回答の割合も全国の数値を下回る。この点から見れば、本学における教員の授業への取り組みについては、全体としては学生たちから一定の評価が得られている（あくまでも相対的に見れば、という限定の上ではあるが）ものと判断される。

TA 補助の少なさに関しては、本学文学部には上級教育機関に当る大学院が設置されておらず、大学院生が不在であるという制約から考えればやむを得ない面もあると思われる。

問8「授業はどのくらい役に立っているか」、「自分の実力」

本設問は、授業が各項目に対してどのくらい役に立っているか（有用性）、および各項目に該当する自分の実力に対して、それぞれ4段階で評価するものである。評価の上位の2段階を+、下位の2段階を-として、大きく二分して集計する。

「将来の職業に関連する知識や技能」については、全国では有用性の+評価が71.1%、実力の+評価が23.8%であるのに対し、本学ではそれぞれ67.0%、19.0%である。

「専門分野に関する知識・理解」については、全国では有用性の+評価が78.9%、実力の+評価が29.1%であるのに対し、本学ではそれぞれ81.2%、27.3%である。

「専門分野の基礎となるような理論的知識・理解」については、全国では有用性の+評価が77.7%、実力の+評価が30.4%であるのに対し、本学ではそれぞれ78.3%、27.9%である。

「論理的に文章を書く力」については、全国では有用性の+評価が55.4%、実力の+評価が33.7%であるのに対し、本学ではそれぞれ61.7%、28.6%である。

「人にわかりやすく話す力」については、全国では有用性の+評価が54.2%、実力の+評価が35.6%であるのに対し、本学ではそれぞれ58.5%、25.0%である。

「外国語の力」については、全国では有用性の+評価が33.6%、実力の+評価が14.6%であるのに対し、本学ではそれぞれ46.5%、17.1%である。

「ものごとを分析的・批判的に考える力」については、全国では有用性の+評価が66.0%、実力の+評価が43.8%であるのに対し、本学ではそれぞれ62.7%、33.5%である。

「問題を見つけ、解決方法を考える力」については、全国では有用性の+評価が66.5%、実力の+評価が44.7%であるのに対し、本学ではそれぞれ63.6%、34.7%である。

「幅広い知識、もののみかた」については、全国では有用性の+評価が71.9%、実力の+評価が45.4%であるのに対し、本学ではそれぞれ73.0%、39.7%である。

以上のとおり、各項目に対する授業の有用性に関しては、全国平均とほぼ同等もしくは上回る評価がなされているのに対して、自分の実力については、各項目とも低く評価する傾向が見られる。この傾向が本学学生の気質に由来するものか、他の要因によるものかは本調査の結果のみからでは判断できない。別の観点からの調査をも踏まえたうえで分析する必要があると考えられる。

「入学後の経験」

問9「入学後の経験の有無」

本設問は入学後における各項目についての経験の有無、およびその有用性を評価し回答するものである。内訳の項目には、全国調査の項目を少し修正したものや、全国調査にはないが本学独自の項目として加えたものがある。

「授業の履修方法やカリキュラムについての体系的なガイダンス」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が67.4%であるのに対し、本学では70.5%

である。

「大学での勉強方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が 33.6%であるのに対し、本学では 37.8%である。

「就職や将来のキャリアをテーマとした科目」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が 52.0%であるのに対し、本学では 62.2%である。

「資格試験などの受験準備のための科目・講座」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が 35.1%であるのに対し、本学では 33.0%である。

「インターンシップ（現場学習等を含む）」については、全国では「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計が 25.1%であるのに対し、本学では 22.5%である。

「国際交流センター主催の短期海外研修・ASEACCU など」は本学が独自にアレンジした項目である。全国では「短期の海外留学（4ヶ月～1年程度）」という項目であり、これに対する「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計は 4.9%であるのに対し、本学の項目においては 9.4%である。

「カトリックセンター主催のボランティア」は本学が独自に設けた項目であるが、これに対する「有用だった」「非常に有用だった」の回答の合計は 4.5%である。

問 10 「入学後に感じたり思ったりしたこと」

本設問は入学後における各項目についての経験の有無を回答するものである。

「授業の内容についていけない」については、全国では「ときどきある」「よくある」の回答の合計が 44.7%であるのに対し、本学では 39.5%である。

「専門分野が本当に自分に合っているのかよくわからない」については、全国では「ときどきある」「よくある」の回答の合計が 49.4%であるのに対し、本学では 54.1%である。

「できれば別の大学に転学・編入したい」については、全国では「ときどきある」「よくある」の回答の合計が 20.7%であるのに対し、本学では 21.9%である。

以上の結果から見れば、本学の学生は、授業についていけないと感じることは全国平均より少ないが、専門分野とのミスマッチに悩む学生が半数以上に及び、全国平均を上回っていること、転学・編入を考えることもやや多いということがわかる。

本学のカリキュラム・学習環境に関する課題

以上の調査結果の全国平均との比較を通じて浮かび上がる本学学生の学習実態および本学のカリキュラム・学習環境の問題点として、次の数点を挙げることができる。

- ①授業外学修時間の不足
- ②卒業後のキャリア形成に対する意識の薄さ
- ③友人とのコミュニケーションによる学修機会の不足
- ④教員とのコミュニケーション形成の不足

- ⑤TA 制度の不足
- ⑥自分の実力に対する自信の欠如
- ⑦資格試験準備プログラムの不足
- ⑧インターンシップの機会の不足
- ⑨専門分野とのミスマッチの多さ

上の各課題に対する教務部の対応として、①に関しては、シラバスに予習・復習等の授業時間外学修の内容や時間の目安等を記載するよう各教員に依頼するとともに、授業時間外の学修を学生に促すような授業展開を各教員に働きかけてゆくこととする。

②に関しては、特に文学部に関わる問題であり、文学部のカリキュラムにキャリア関連の科目を新設することなどを検討する。

③および⑤に関しては、学生相互の学修支援ができるような制度の構築をめざし、学生協働を視野に入れつつ検討する。

④に関しては、学生から教員へコミュニケーションを取りやすくするような授業態度を心がけるよう各教員に働きかける。

⑥に関しては、他の観点にもとづく調査方法も検討する。また、学修成果が実感しやすくなるような授業方法についての工夫を各教員に働きかける。

⑦⑧に関しては、キャリア支援センター等と共同で検討する。SPI 対策等に関しては Eラーニングシステムの導入も検討課題となる。

⑨入試段階での広報（情報発信）の充実を各学科に働きかける。また、転部、転科制度や文学部のクラスター制等についての情報発信にも留意する。

なお、全国平均との比較で本学が下回っているわけではないが、やや低い水準にある項目として、例えば、⑩「少人数、ゼミ形式の授業」については、約 52%の学生が「あった」と回答しているが、「少人数教育」を大学の方針として標榜する本学の数値として満足のいくものではない。大人数のゼミについては人数の調整をするなど、何らかの対策が必要であるかもしれない。

⑪「外国語の力」の自己評価で+の評価をした学生が約 17%に止まるのも問題である。外国語運用能力を効率的に伸ばす、もしくは能力の伸びを実感しやすくするようなカリキュラムや授業方法、教学システムの開発・導入を検討する必要がある。

⑫「大学での勉強方法（スタディ・スキル）を学ぶ科目」についても 4 割弱の学生が「有用だった」と回答するに止まっている。そもそもこうした科目を設けていない学科もあり、独立した科目でなくても、何らかの形で授業の中などでこうした内容を学ばせる機会を作ること検討する必要がある。

また、⑬「国際交流センター主催の短期海外研修・ASEACCU など」を有用と答えた学生も、全国平均よりは多いものの 1 割に満たない。そもそもこうした研修には募集人数の枠が設けられている場合もあり、参加する学生が少ないことが理由である。今後はより多くの学生を参加させるよう、方策を検討する必要があるだろう。